

当博物館所蔵の厨子甕の編年について

岸 本 敬*

Chronology of Zushi-game (Burial Urn) collected in Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

Takashi KISHIMOTO*

はじめに

沖縄の墓室内には、洗骨後の遺骨を納めた納骨器である厨子甕（ジーシガーミ）が納められている。厨子甕のその大きさは、沖縄の焼き物でも最大級のものである。また、多彩な成形や装飾技法、釉薬の種類の多さなど、どれをとっても最も豪華な焼き物といってよい。沖縄県立博物館・美術館には博物館収蔵品としてこうした厨子甕が多数収蔵されており、そのほとんどは、長年当館の学芸員として勤務された上江洲均氏によって収集・研究されてきたものである。現在その収蔵数は、破片資料など完形でないものを含め1200点近くにのぼり、県内でも最大のコレクションとされる。また、ほとんどの資料が博物館1階の民俗収蔵庫と大型収蔵庫内に収蔵されており、良好な保存環境にも恵まれている。

厨子甕については、いくつかの研究があるが、ここでは上江洲均氏の研究を基本とする。氏は、厨子甕の素材を木製・石製・陶製の3つに分類し、さらに陶製厨子について造形や釉薬などにより8形式を設定している。本稿では収蔵資料の中でも、銘書（ミガチ）からその製作・使用年代がほぼ特定できると考えられる約400点の石厨子や8形式の陶製厨子（ボージャー・赤焼御殿型・マンガン掛け焼締め・マンガン掛け庇つき焼締め・荒焼御殿型・上焼本御殿型・上焼ツノ型・上焼コバルト型）について、その編年を考察するものである。

なお、銘書の判別については、死亡年・洗骨年とも記銘されているものについては洗骨年を、紀年と

干支がずれて記銘されていると思われるものなどについてでは紀年を、それぞれ制作・使用年代として用いている。

1. 石厨子

石厨子の素材には、輝緑岩・石灰岩（サンゴ石灰岩）・凝灰岩があるが、当館に収蔵されている石厨子は117基で、凝灰岩製の3基以外は、石灰岩（サンゴ石灰岩）製である。そのうち銘書から年代がほぼ特定できるものは26基と少なく、なかでも最も古い銘は、崇禎三年（1630）で凝灰岩製（写真1）のものであり（この石厨子は現在九州国立博物館に永久寄託されている）、次いで古い銘が康熙二十七年（1688）で石灰岩製石厨子（写真2）のものである。

表1にあるように、26基のうち18世紀後半までに製作・使用されたと考えられるものが17基と全体の3分の2以上にあたり、19世紀以降には少なくなっている。このことから、17世紀末（1682年）に壺屋へ各地の窯が統合され、18世紀後半には、ボージャー厨子などの陶製（焼き物）厨子が一般化していくことで、納骨器としての石厨子の使用が減少していったことが考えられる。ただ、沖縄本島中部東海岸地域は、石灰岩（サンゴ石灰岩）の産地で、上江洲氏の調査からも昭和初期まで石厨子を作っていたという⁽¹⁾。表1にある19世紀以後の石厨子9基中8基も、中城村など沖縄本島中部東海岸地域から収集されたと考えられるものである。

* 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-Shi, Okinawa, 900-0006 Japan.

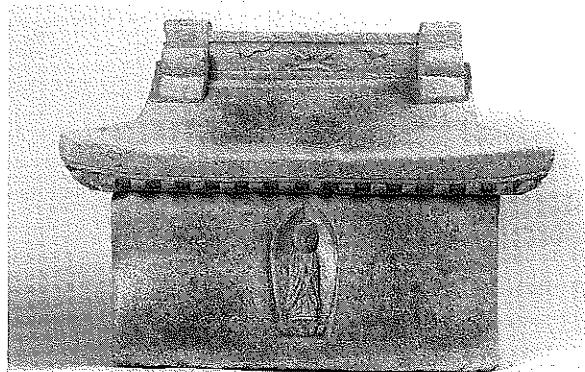


写真1



写真2

2. ボージャー厨子

ボージャー厨子（ボージャージーシ）は、装飾のための線彫りや張りつけのない形が、「禿げ坊主」を連想させるところからついた名と考えられる。陶製（焼き物）厨子甕のなかで最も古いもので、このタイプの古い型には、読谷村喜名にあった窯で焼かれ、康熙年間（1662-1722）に制作されたと考えられる喜名焼厨子甕も含まれる。収蔵されているボージャー厨子119基のうち、3基が喜名焼である。銘書から年代がほぼ特定できるものはかなり少なく、20基にすぎない。最も古い銘のある資料は、1974年に那霸市銘苅から収集された康熙九年（1670）銘入りの喜名焼厨子甕（写真3）で、次いで康熙十年（1671）銘入りのこれまた喜名焼厨子甕（寄託品・写真4）である。これらの資料の銘は、1682年の壺屋への窯の統合以前なので、喜名焼の歴史を考える上で大変貴重である。さらに康熙九年（1670年）の銘は、現在確認されている陶製（焼き物）厨子甕の銘のなかで最も古いものである。

これに関連して乾隆元年（1736）編纂の『四本堂家礼』という本のなかに、洗骨方法などとともに「焼物厨子」の使用をうかがわせる記事がある。この『四本堂家礼』の編纂された当時の「焼物厨子」について、上江洲氏は「恐らく、康熙九年（1670年）銘入りの甕型の事例から考えて、似たようなものだったに違いない。……その甕の型は乾隆年間まで、すなわち壺屋窯への統合後も引き継がれたようである」と指摘している⁽²⁾。また、各地の古墓におけるボージャー厨子の数の多さなどから、納骨器とし



写真3



写真4

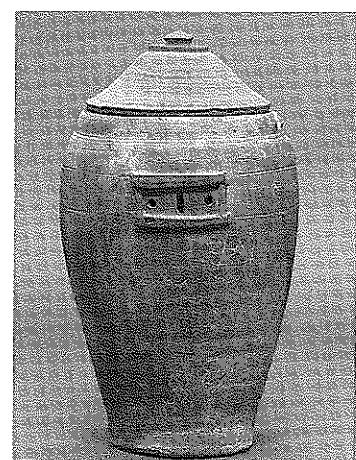


写真5

ての厨子甕の使用の一般化を「18世紀半ばではないか」と推察している⁽³⁾。当館に収蔵されているポーボーイー厨子も表1にあるように、銘書から年代がほぼ特定できる20基のうち17基が18世紀のそれも乾隆年間(1736~1795)に集中しており[写真5・乾隆三年(1738)銘入りなど]、上江洲氏の指摘を裏付けるものといえる。

3. 赤焼御殿型

家型(御殿型)の石厨子を陶製(焼き物)におきかえた感じのものである。全面に石灰塗装し、白っぽくみせているものが多いことからも、石厨子を意識して制作されたと考えられる。登場するのは18世紀前半と考えられており、当館収蔵で最も古い銘のある資料は、雍正五年(1727)銘入りのもの(写真6)である。収蔵総数も38基と少なく、表1にあるように、銘書から年代がほぼ特定できるものもわずか9基であるが、そのうち7基が18世紀の雍正・乾隆年に集中している。御殿型厨子甕が19世紀以降、マンガン掛けの荒焼(焼締め)、釉薬をかけた上焼(本御殿型・ツノ型・コバルト型)へと進展していくなかで、姿を消していったのではないかと考えられる。



写真6

4. マンガン掛け焼締め

全面にマンガンを掛けた黒っぽい焼締めの厨子甕である。表1からもわかるように、このタイプは18世紀後半から戦後まで制作され、数の上で最も多い。当館の収蔵総数も440基で、他を圧倒しており、銘書から年代がほぼ特定できるものも150基で最多である。実際現在も寄贈の申し出をいただいた際に、いちばん多く目にするのがこのタイプである。

最も古い銘のある資料は、乾隆二十年(1755)銘入りのもの(写真7)である。また、上江洲氏は「ボージャー厨子がそろそろ少なくなる1770年代に、取つてかわるように出るのが、マンガン掛けの焼締め厨子甕である」と述べている⁽⁴⁾。調べてみると、18世紀後半のもので1770年代以降の銘のあるものが、ボージャー厨子が14基中5基、マンガン掛け焼締めが13基中10基となっており、これも上江洲氏の指摘を裏付けるものとなっている。

5. マンガン掛け底つき焼締め

これも全面にマンガンを掛けた黒っぽい焼締めの厨子甕であるが、胴部に底がつき、マンガン掛け焼締めよりも張りつけなどの装飾の多いタイプである。当館の収蔵総数は123基で、銘書から年代がほぼ特定できるものが73基である。最も古い銘のある資料は、18世紀末の嘉慶四年(1799)銘入りのもの(写真8)である。表1からもわかるように、このタイプは19世紀前半から戦前(昭和10年代)まで制作され(戦後のものが1基あるが、昭和47年の銘があり、特別なものとして制作された可能性が高い)、マンガン掛け焼締めとほぼ同時期に流通していたと考えられる。マンガン掛け焼締めが庶民向けだったのに対して、これは中流以上の家柄で用いられていたようである。

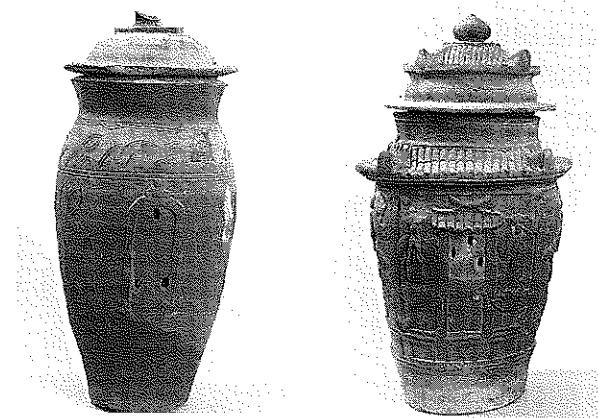


写真7



写真8

6. 荒焼御殿型

全面にマンガンを掛けた黒っぽい焼締めの御殿型厨子甕である。当館の収蔵総数は35基と少なく、銘書から年代がほぼ特定できるものが20基である。最

も古い銘のある資料は、乾隆三十四年（1769）銘入りのもの（写真9）である。表-1からもわかるように、このタイプは20基中18基が19世紀に制作され、そのうちの12基は19世紀前半の道光年間（1821～1850）に集中していることがわかる。20世紀以降にはみられないことから、御殿型厨子甕が釉薬をかけた上焼（本御殿型・ツノ型・コバルト型）へと進展していくなかで、姿を消していったのではないかと考えられる。

7. 上焼本御殿型

化粧掛けの上に飴釉や緑釉、呉須を用いた色彩豊かなものが多く、壺屋を代表する焼き物でもあった。また、窯内で占める空間が大きく、価格も高くついた。当館の収蔵総数は68基で、銘書から年代がほぼ特定できるものが約半数の32基である。古い銘のある資料として、乾隆五十七年（1792）銘入りのものがあるが、これは戦後に制作された小型の厨子甕に移葬したものと考えられ、これ以外では、道光二十一年（1841）銘入りの資料（写真10）が最も古いものである。表-1にあるように、このタイプは19世紀後半に集中しており、さらに明治期に多い。また、大正期以降に少なくなっているのは、同じ上焼御殿型のツノ型やコバルト型が多くなってくるからだと考えられる。

8. 上焼ツノ型

この型を俗にソーバーと言う。ソーバーは、商売用につくったものの意で、転じて安っぽいもののことである。主に白化粧掛けの上へ、コバルトや飴釉、

緑釉などをつけたもので、色彩が美しく、屋根の各部にはツノ状で無釉の突起を立てているのが特徴である。ツノはたいてい三本一組で、十数組つくっている。その上へ皿や碗等の他の雑器をのせて焼くための台である。つまり限られた窯内の空間をフルに利用するために考案されたものである。したがって、コスト安となり、いわゆるソーバーということになる。当館の収蔵総数は81基で、銘書から年代がほぼ特定できるものが54基である。最も古い銘のある資料として、乾隆五十二年（1787）銘入りのもの（写真11）がある。表-1にあるように、このタイプは19世紀後半から20世紀前半に集中しており、明治期から昭和初期頃まで一般普及型として盛んに制作されたようである。

9. 上焼コバルト掛け

明治期以降に輸入されるようになった西洋コバルトを全面にかけたものであり、飴釉を部分的に添え、二色とすることもある。当館の収蔵総数は44基で、銘書から年代がほぼ特定できるものが28基である。古い銘のある資料として、嘉慶年間（1796～1820）銘入りのものが2基、咸豐年間（1851～1861）銘入りのものが1基ある。しかし、この3基については、戦後に移葬されたものであり、これら以外では、光緒十三年（1887）銘入りの資料（写真12）が最も古いものである。表-1にあるように、このタイプも19世紀後半から20世紀前半に集中しており、明治期から昭和初期頃まで制作されたようである。また、小型のものが5基含まれているが、これは戦後に制作されたものと考えられる。

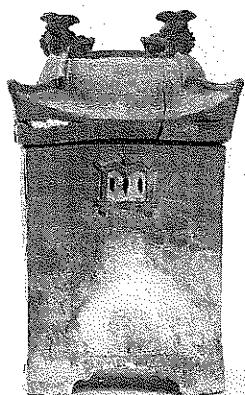


写真9



写真10

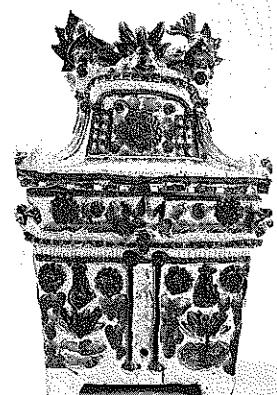


写真11



写真12

10. 古我知焼

古我知窯跡は現在の名護市字古我知にあり、窯の規模、開窯・閉窯の時期など詳細は不明だが、18世紀を通して生産され、19世紀前半には廃窯したと考えられている。厨子甕は甕型（写真13）と御殿型（写真14）がつくられ、双方ともに施釉される。当館の収蔵総数は26基で、甕型が15基、御殿型が11基である。しかし、御殿型の11基については、現在のデータ分類上11基となっているだけで、そのうちのいくつかは古我知焼でない可能性も高い（確実に古我知焼といえそうなものは4基ほどで、年代の特定不能）。甕型についてのみをみても、銘書から年代がほぼ特定できるものは1つもない。古我知焼の厨子甕の銘書がほとんど残っていない理由について、宮城篤正氏は「残念なことに殆どの年代が収集家の手によって消されてしまっている現象があまりにも多い」と述べている⁽⁵⁾が、当館収蔵の資料についてもそれがあてはまると考えらえる。

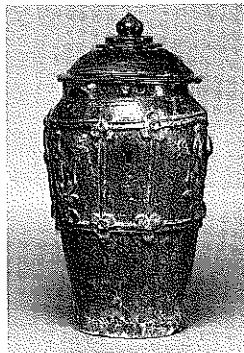


写真13

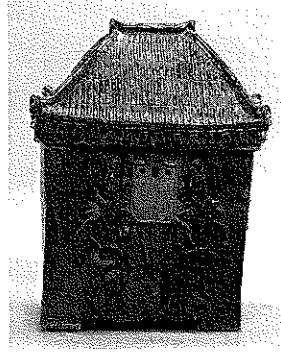


写真14

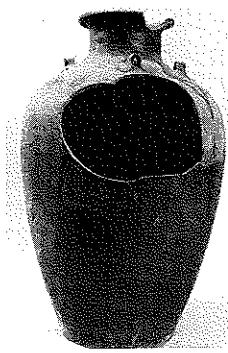


写真15



写真16

11. 転用品など

石厨子や8形式の陶製（焼き物）厨子甕に分類されないものが、80基ほど収蔵されているが、その多くは戦後に制作されたと思われる素焼きの小型厨子甕（骨壺）である。道光年間の銘がみられるものもあるが、戦後に移葬されたものと思われ、ほとんどは昭和20年（1945）以降の銘のものである。

大型のものでは、水甕などを厨子甕として転用したものがあり、なかには胴部が大きく割れた四耳大壺（写真15）もある。これは、壺などは口径が小さいことから、頭蓋骨を入れるためにわざと胴部を打ち欠いたものである。銘書から年代がほぼ特定できるものは、2基だけで、乾隆五十四年（1789）（写真16）と道光九年（1829）（写真17）の銘入りのもので、いずれも水甕などからの転用品である。

12. その他

ここでは、陶製（焼き物）厨子甕の編年だけでなく琉球・沖縄の陶業史全体の歴史を考える上で貴重だと思われる2基の資料について紹介したい。

（1）焼締甕型厨子甕（寄託品）（写真18）

胴部は厨子甕の中でも数少ない六角形で、台座を擁しているという形態も珍しい。

胴部正面には空気孔のある家が配され、その下に釘彫りの銘文が刻まれ、康熙五十二年（1713）頃に制作されたことがわかる。さらに重要な内容として、康熙五年（1666）に、高良筑登之親雲上の陳情に基づいて、人口の少ない真和志間切牧志村（現那霸市牧志）に小禄間切小禄村（現那霸市小禄）から50人が移住させられたことがわかる。これは、康熙二十一年（1682）、王府によって各地の窯場が牧志村



写真17



写真18

(壺屋)へ統合され、壺屋焼の操業が開始されたことと考え併せると、琉球・沖縄の陶業史を探る上で大変貴重な記録といえる。

(2) 法林和尚獅子型陶製骨壺（美術工芸分野収蔵品）

これまで知られている骨壺（厨子甕）のなかで、獅子型骨壺の類例は今のところこの1点のみで極めて珍しい。ただ残念なことに獅子の頭部は紛失しており、存在しない。

獅子の胸部前面（写真19）には「前任龍福寺法林和尚」、右肩側面（写真20）には「康熙四十七年戊子二月九日作細工和久田村渡口仁也」と釘彫りで銘文が刻まれている。この銘文から、この骨壺は以前に浦添の龍福寺の住職であった法林和尚の遺骨を納めたものであり、康熙四十七年（1708）に和久田（湧田）村の渡口仁也なる陶工の手によってつくられたことがわかる。また、土質面からみても湧田あたりで焼かれた可能性が高いが、1708年といえば、壺屋への窯場の統合（1682）から26年の歳月が流れている。湧田の窯がまだ一部では残存していたことなどが考えられ、陶業史や陶製獅子の研究にも貴重な資料であるといえる。

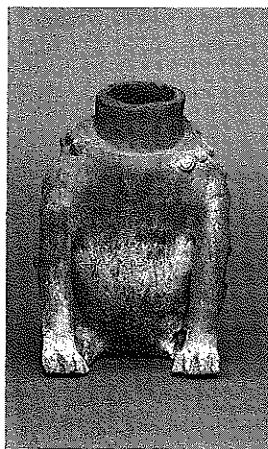


写真20



写真19

当館所蔵の厨子甕によって検証することができた意義は大きい。今回は厨子甕の多彩な装飾技法や釉薬の種類について触れることはなかったが、それは厨子甕だけでなく琉球・沖縄の陶業史全体を探る上でも重要なものになると思われる。機会があれば、その一部分でも稿をあらためて言及したい。

【脚注】

- (1) 上江洲均『沖縄の暮らしと民具』1982年
慶友社 258頁
- (2) 同上 249頁
- (3) 上江洲均『沖縄の民具と生活』2005年
榕樹書林 267～268頁
- (4) 上江洲前掲書、261頁
- (5) 宮城篤正「古我知窯の全容を探る」『琉球の古陶I 古我知焼』1972年 琉球文化社 140頁

【参考文献】

- 上江洲均『沖縄の民具』慶友社 1973年
上江洲均『沖縄の暮らしと民具』慶友社 1982年
上江洲均『沖縄の民具と生活』榕樹書林 2005年
浦添市史編集委員会（編）『浦添市史 浦添の文献 資料第二巻資料編1』浦添市役所 1981年
大城精徳・宮城篤正『琉球の古陶（1）古我知焼』
琉球文化社 1972年
沖縄県地域史協議会（編）『シンポジウム南島の墓—沖縄の葬制・墓制』沖縄出版 1989年
沖縄県立博物館・美術館 博物館企画展『ずしがめの世界』2008年
佐賀県立九州陶磁文化館『平成10年度企画展 沖縄のやきもの—南海からの香り—』1998年
名嘉真宜勝『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社 1999年
平敷令治『沖縄の祖先祭祀』第一書房 1995年

おわりに

以上、当館所蔵の厨子甕についてその編年の概要を記してみた。銘書から年代をほぼ特定できた資料は、収蔵総数の約4割であったが、素材や形式による制作・使用年代のおおまかな編年・変遷については把握できたと思われる。また、厨子甕について考えるたびに参考にしてきた上江洲均氏の研究成果を、

表1 博物館所蔵厨子甕編年一覧

資料名	素材	銘書あり /総数	判別 数	17世紀 前半	17世紀 後半	18世紀 前半	18世紀 後半	19世紀 前半	19世紀 後半	20世紀 前半	20世紀 後半	備考
石厨子	石灰岩 凝灰岩	40/117	26	1	3	7	6	4	4	1	0	• 崇禎年間 (1628~1644) 1 • 康熙年間 (1662~1722) 6 • 雍正年間 (1723~1735) 3 • 乾隆年間 (1736~1795) 7 • 嘉慶年間 (1796~1820) 3 • 道光年間 (1821~1850) 1 • 咸豐年間 (1851~1861) 1 • 同治年間 (1862~1874) 3 • 光緒 (1875~1908) / 明治 (1868~1912) 年間 0 • 大正 (1912~1926) 年間 0 • 昭和八年 1
ボージャー	陶土	31/120	20	0	2	3	14	1	0	0	0	• 康熙年間 (1662~1722) 2 • 雍正年間 (1723~1735) 0 • 乾隆年間 (1736~1795) 17 • 嘉慶年間 (1796~1820) 1
赤焼御殿型	陶土	13/38	9	0	0	3	4	1	1	0	0	• 雍正年間 (1723~1735) 3 • 乾隆年間 (1736~1795) 4 • 嘉慶年間 (1796~1820) 1 • 道光年間 (1821~1850) 0 • 咸豐年間 (1851~1861) 0 • 同治年間 (1862~1874) 1
マンガン掛け焼締め	陶土	184/440	150	0	0	0	13	36	42	48	11	• 乾隆年間 (1736~1795) 10 • 嘉慶年間 (1796~1820) 10 • 道光年間 (1821~1850) 29 • 咸豐年間 (1851~1861) 6 • 同治年間 (1862~1874) 5 • 光緒 (1875~1908) / 明治 (1868~1912) 年間 40 • 大正 (1912~1926) 年間 18 • 昭和 (1926~1988) 年間の うち戦前 (1926~1945) 19 戦後 (1946~1988) 13
マンガン掛け底付き焼締め	陶土	87/123	73	0	0	0	1	23	26	22	1	• 乾隆年間 (1736~1795) 0 • 嘉慶年間 (1796~1820) 9 • 道光年間 (1821~1850) 16 • 咸豐年間 (1851~1861) 7 • 同治年間 (1862~1874) 6 • 光緒 (1875~1908) / 明治 (1968~1912) 年間 19 • 大正 (1912~1926) 年間 8 • 昭和 (1926~1988) 年間の うち戦前 (1926~1945) 7 戦後 (1946~1988) 1
荒焼御殿型	陶土	22/35	20	0	0	0	2	12	6	0	0	• 乾隆年間 (1736~1795) 2 • 嘉慶年間 (1796~1820) 0 • 道光年間 (1821~1850) 12 • 咸豐年間 (1851~1861) 2 • 同治年間 (1862~1874) 3 • 光緒 (1875~1908) / 明治 (1868~1912) 年間 1 • 大正 (1912~1926) 年間 0 • 昭和 (1926~1988) 年間の うち戦前 (1926~1945) 0 戰後 (1946~1988) 0

資料名	素材	銘書あり /総数	判別 数	17世紀 前半	17世紀 後半	18世紀 前半	18世紀 後半	19世紀 前半	19世紀 後半	20世紀 前半	20世紀 後半	備考
上焼本御殿型	陶土	38/68	32	0	0	0	1	3	24	3	1	<ul style="list-style-type: none"> ・乾隆年間 (1736~1795) 1 ・嘉慶年間 (1796~1820) 0 ・道光年間 (1821~1850) 3 ・咸豐年間 (1851~1861) 2 ・同治年間 (1862~1874) 9 ・光緒 (1875~1908) / 明治(1868~1912)年間 14 ・大正(1912~1926)年間 1 ・昭和(1926~1988)年間のうち戦前(1926~1945) 1 戦後(1946~1988) 1
上焼ツノ型	陶土	60/81	54	0	0	0	1	2	30	21	0	<ul style="list-style-type: none"> ・乾隆年間 (1736~1795) 1 ・嘉慶年間 (1796~1820) 0 ・道光年間 (1821~1850) 2 ・咸豐年間 (1851~1861) 0 ・同治年間 (1862~1874) 3 ・光緒 (1875~1908) / 明治(1868~1912)年間 35 ・大正(1912~1926)年間 8 ・昭和(1926~1988)年間のうち戦前(1926~1945) 5 戦後(1946~1988) 0
上焼コバルト掛け	陶土	35/44	28	0	0	0	0	2	4	17	5	<ul style="list-style-type: none"> ・乾隆年間 (1736~1795) 0 ・嘉慶年間 (1796~1820) 2 ・道光年間 (1821~1850) 0 ・咸豐年間 (1851~1861) 1 ・同治年間 (1862~1874) 0 ・光緒 (1875~1908) / 明治(1868~1912)年間 8 ・大正(1912~1926)年間 3 ・昭和(1926~1988)年間のうち戦前(1926~1945) 9 戦後(1946~1988) 5
計		510 1066	412	1	5	13	42	84	137	112	18	